













番号	作品名称 るび	時代	窯/作者	登録番号	法量(cm)	重さ(g)	備考	作品解説	図版
1	青磁 印文 四耳壺 せいじいんもんしじこ JAR WITH FOUR HANDLES Celadon with impressed design	後漢時代・1～2世紀 Eastern Han dynasty, 1st-2nd century	越窯 Yue ware	01199	h:29.2 d:32.0	4,460		商周から春秋戦国、そして前漢時代にかけて青磁の前身ともいえるいわゆる「原始青磁」が江南地域を中心に発展しました。そして、後漢時代になるとついに成熟した青磁が浙江省東北部の曹娥江(そうがこう)流域、かつての越国の地で誕生しました。胴部全体に施された印文は同時期の印文硬陶と同じ技術です。類似の破片が上虞(じょうぐ)の小仙壇(しょうせんたん)窯址などから出土しています。	
2	青磁 神亭壺 せいじしんていこ FUNERARY JAR Celadon with applied decoration	呉～西晋時代・3世紀 Wu - Western Jin dynasty, 3rd century	越窯 Yue ware	01201	h:48.5 d:29.0	7,420		神亭壺は三国から西晋時代にかけて、江南の浙江省や江蘇省を中心とした地域の墓に副葬された特殊な明器(めいき)です。壺の上部には楼閣や様々な人物や動物などの彫塑が見られます。楼閣門闕(もんけつ)前の碑には、「会稽出始寧用此喪葬宜子孫作吏高遷衆無極」と刻まれていることから、この壺が現在の浙江省の上虞(じょうぐ)一帯でつくられ、被葬者の子孫繁栄を祈願するためのものであったことなどが分かります。	
3	青磁 天鶏壺 せいじてんけいこ EWER WITH CHICKEN-HEADED SPOUT Celadon	北朝時代・6世紀 Northern Dynasties period, 6th century	越窯	03973	h:28.0 w:15.2	1,545	卯里欣侍氏寄贈(白樺廬コレクション) Gift of Mr. Usato Kinji (The Hakutoro Collection)	天鶏壺は「鶏首壺(けいしゅこ)」とも呼ばれます。鶏の頭を象った注口が特徴で、西晋から唐時代にかけて流行しました。注口が単なる飾りで実用性のないものも見られることから、副葬用の明器(めいき)と考えられ、墓からの出土例も多く知られています。本作は北魏墓出土品に類例が見られることから、6世紀前半の華北産と考えられます。大小様々なサイズのもの知られており、当館自宅コレクションには最大級のものが見られますが、これは小ぶりの可愛いものです。二度がけされた青磁釉はガラス質の美しい発色を見せています。	
4	青磁 碗 せいじわん BOWL Celadon	唐時代・9世紀 Tang Dynasty, 9th century	越窯 Yue ware		h:5.0 d:14.2	274	参考出品 Reference Exhibit	作品No.5と同じ玉璧底(ぎょくへきてい)碗ですが、前者は器壁が直線的にひらく形ですが、本例は湾曲しながらひらく形です。玉璧底碗にはそのつくりや釉の掛け方などに精粗の差が見られます。慈溪(じけい)市の上林湖荷花芯窯址(じょうりんこかしんようし)からも出土しています。その発掘成果によると、底部まで釉を施し、丁寧なつくりの玉璧底碗は、一つの匣鉢(さやばち)に1点だけ入れて焼かれるか、重ね焼きの際に最上部に置かれたもので、とくに高級なものであったとされています。底部まで釉がかけられた本例も越窯茶碗の中でも高級品であったといえます。	 
5	青磁 碗 せいじわん BOWL Celadon	唐時代・9世紀 Tang Dynasty, 9th century	越窯 Yue ware	02853	h:4.7 d:15.6	249	卯里欣侍氏寄贈(白樺廬コレクション) Gift of Mr. Usato Kinji (The Hakutoro Collection)	中国では「玉璧底(ぎょくへきてい)」(日本では「蛇の目高台(じやのめこうだい)」)と呼ばれる独特な底部をもつ茶碗です。こうした茶碗は8世紀後半から9世紀後半頃にかけて流行し、越窯青磁のみならず定窯や邢窯の白磁でも見られます。唐・陸羽の『茶経』において、玉を思わせる独特の色調と質感から当時最高位にランクづけされた越窯の茶碗がこうした茶碗であったと考えられます。越窯の玉璧底碗は当時大量に生産され、中国国内のみならず、朝鮮半島や日本、さらにはエジプトなどからも出土しており、国内外に広く流通したことが分かります。	 
6	青磁 六耳壺 せいじろくじこ JAR WITH SIX HANDLES Celadon	五代時代・10世紀 Five Dynasties period, 10th century	越窯 Yue ware	00720	h:33.4 d:26.3	3,980	住友グループ寄贈(自宅コレクション) Gift of Sumitomo Group (The Ataka Collection)	晩唐から五代にかけて、浙江省慈溪(じけい)市の上林湖を中心に分布した越窯では、宮廷献上用の「秘色(ひしょく)」を筆頭とした青磁が生産されました。越窯青磁は海外に輸出されたものも多く、本作もインドネシアのセラベス(スラウェシ)島で出土し、当地の国王が秘蔵していたものと伝えられています。壺の内外に施された青磁釉は、失透性の黄味がかった発色を見せています。蓋付の類品が江蘇省蘇州市の五代墓などから出土しています。	
7	青磁 輪花碗 せいじりんかわん FOLIATED BOWL Celadon	五代時代・10世紀 Five Dynasties, 10th century	越窯 Yue ware	01232	h:5.8 d:16.0	237		五輪花形の碗で、高台は玉璧底(ぎょくへきてい)よりも接地部分の幅の狭い「玉環底(ぎょくかんてい)」と呼ばれるタイプです。玉環底碗は浙江省臨安(りんあん)市で発見された五代呉越国第二代国王・銭元瓘(せんげんかん)の妻、馬氏王后の康陵(こうりょう)(940年)から類例が出土していることなどから、五代に盛行した器型と考えられています。本例は釉色や造形など康陵の類例に勝るとも劣らないもので、五代の越窯「秘色」青磁の典型的な作例の一つといえます。	 

番号	作品名称 るび	時代	窯/作者	登録番号	法量 (cm)	重さ (g)	備考	作品解説	図版
8	青磁刻花 葉文 壺 せいじこっか ようもん つぼ COVERED CELADON JAR  decorated with carved overlapping leaf design	北宋時代・10～11世紀 Northern Song Dynasty 10th-11th century	越窯 Yue ware	01222	h:12.1 d:12.0	516		壺の胴と蓋が刻花による浮彫風の葉文で覆われており、あたかもみずみずしい植物のような造形感覚を見せています。葉の中央には刻花でしっかりとした葉脈が表され、それを中心に線刻による細かな葉脈が斜めに走っています。茎状の蓋のつまみは断面もきちんと表され、この壺のチャームポイントとなっています。艶やかで淡い青緑色の釉色は、北宋越窯の「秘色」といえるものです。	
9	青磁透彫 唐草文 蓋托 せいじすかしほり からくさも ん さんたく CUP STAND  Celadon with open-worked design of scrolling plant	五代～北宋時代・10～11世紀 Five Dynasties- Northern Song Dynasty, 10th-11th century	越窯 Yue ware	01218	h:3.2 d:12.8	230	王梅生氏寄贈 Gift of Mr. Wang Meisheng	本例は五代から北宋初期にかけての秘色青磁のなかでも極めて発色(はっしよく)の美しい作例といえます。蓋托(さんたく)とは蓋(碗)を置く受皿(今日いう茶托(ちゃたく))であり、各種茶器の生産でも著名な越窯では様々な種類の蓋托が知られています。本例は碗を受ける部分がやや低く平らなタイプです。托の中央部分には陰刻で唐草文が表され、またその側面には彫り文様が施され、さらに蓋托の縁には唐草文が透し彫りされています。各種装飾技法と釉色の美しさが見事に調和した作例です。	
10	青磁刻花 鸚鵡文 盒 せいじこっか おうむもん ごう COVERED BOX  Celadon with carved & incised parrot design	北宋時代・10～11世紀 Northern Song Dynasty 10th-11th century	越窯 Yue ware	01207	h:5.6 d:12.2	391		「撥高台(ぼちこうだい)」とも呼ばれるやや外反した高台が付きま。こうした盒子は五代から北宋初期にかけて越窯でしばしば見られるもので、蓋には刻花で様々な文様が表されています。本例はやや略化されていますが越窯の文様モチーフとして馴染みのある鸚鵡(オウム)が1羽描かれています。淡い青緑色の釉色はこの時期の特徴といえます。底部には「王(あるいは三)」字の刻銘がかすかに確認できます。五代時期、越窯を管轄下においていた呉越国の王室向けの製品であったのかもしれない。	
11	青磁刻花 花唐草文 輪花盤 せいじこっか はなからくさも ん りんかばん LOBED DISH  Celadon with carved flower scroll design	南宋時代・12世紀 Southern Song dynasty, 12th century	越窯 Yue ware	01203	h:4.2 d:19.5	343		器壁は極めて薄く、口縁を六輪花形にかたどった腰折れ形の盤です。見込みと高台を除く外側面いっぱいにて、片切彫り風に花唐草文が表されています。慈溪(じけい)市の寺龍口窯址(じりゆうこうよし)から類品が出土し、南宋初期の越窯青磁であることが判明しました。杭州市や紹興市からは高台内に「御厨」刻銘のある類品の破片も発見されていることから、南宋宮廷用の食器であったことがうかがえます。寺龍口窯址の南宋初期の製品には官窯青磁風のものも見られることから、この窯は宮廷から命を受け宮廷用の祭器や器皿類を生産した窯と考えられています。	
12	青磁刻花 葉文 八角水注 せいじこっか ようもん はっ かくすいちゅう OCTAGONAL COVERED CELADON EWER  decorated with incised leaf design	北宋時代・11世紀 Northern Song Dynasty, 11th century	龍泉窯 Longquan ware	01204	h:22.6 w:17.8× 14.4	988		胴部を八面に面取りし、瓜形状としており、その祖型は金属器にあると考えられます。各面には劃花と呼ばれる細い線彫りにより、葉文が勢いよく湧き出るかのよう表されています。八角形の蓋には宝珠形のつまみや如意頭形の透彫装飾が見られます。胎土が比較的白いこともあり、釉薬は淡い青緑色を見せ、首の付け根などには美しいガラス質の釉だまりが見られます。同時期の越窯の「秘色」青磁を意識したものとも考えられ、北宋時代前期の龍泉窯青磁の特徴を良く示すものです。こうした水注は温酒器として使われていたと考えられます。	
13	青磁刻花 鴛鴦文 水注 せいじこっか えんおうもん すいちゅう COVERED CELADON EWER  decorated with incised phoenix design	北宋時代・10～11世紀 Northern Song Dynasty 10th-11th century	越窯 Yue ware	01205	h:18.5 w:18.6	675		エレガントな姿を見せる水注で、その祖型は金属器にあると思われます。釉薬はやや黄味がかかった灰緑色を見せています。蓋と胴部には繊細な毛彫り状の陰刻文様が随所に施されており、胴の四面には丸棒内の中央には鳳凰にも似た羽ばたく姿の鴛鴦(えんおう、オンドリ)が表されています。高台内には、中央に「吉」字の刻銘とその周囲に目跡が確認されます。10世紀末から11世紀初めにかけての遼代の墓から類例が出土しており、年代を考える手がかりとなっています。	
14	青磁陰刻 草花文 多嘴壺 せいじいんこく そうかもん た しこ JAR WITH MULTIPLE SPOUTS  Celadon with incised flowering plant design	北宋時代・11世紀 Northern Song dynasty, 11th century	龍泉窯 Longquan ware	00790	h:29.7 w:17.2	1,764	住友グループ寄贈(安宅コレクション) Gift of Sumitomo Group (The Ataka Collection)	肩に見られる5本の角のような管は、壺の内部には通じていません。その特異な形から副葬用の明器とされており、実際に浙江省龍泉の墓からの出土例も報告されています。「五穀」の墨書銘が見られるものがあり、5本の管との関連も推測されます。胴部は突線により分割され、それぞれに簡略な草花文が陰刻されています。薄くかけられた釉薬は光沢があり、やや黄味がかかった淡い灰青緑色です。かつてこうした多嘴壺は越窯の製品とされてきましたが、のちに初期の龍泉窯青磁であることが分かりました。	

番号	作品名称 るび	時代	窯/作者	登録番号	法量 (cm)	重さ (g)	備考	作品解説	図版
15	青磁 輪花盤 せいじりんかばん  LOBED DISH  Celadon	五代～北宋時代・10～11世紀  Five dynasties～Northern Song dynasty, 10th～11th century	黄堡窯あるいは耀州窯  Huangbao ware or Yaozhou ware		h:4.7  d:12.3	125	参考出品  Reference Exhibit	陝西省銅川にある黄堡鎮窯(後の耀州窯)では、越窯青磁を手本としながら、唐宋五代に青磁の生産がはじまりました。灰黒色の胎土やそれに白化粧を施したのから、さらに灰白色の胎土へと明るい色調の青磁が好まれ、淡い青緑色の釉薬をより引き立てるようになりました。本作は灰白色の胎土に淡青緑色の典型的なこの時期の青磁です。器形を十弁の輪花状にした独特の器形は10世紀中頃に流行したものです。高麗青磁の初期の窯でも類似的の器形が生産されており、高麗青磁の誕生時期を考える上で一つの手がかりともなっています。	
16	青磁 輪花碗 せいじりんかわん  LOBED BOWL  Celadon	五代～北宋時代・10～11世紀  Five dynasties～Northern Song dynasty, 10th～11th century	黄堡窯あるいは耀州窯  Huangbao ware or Yaozhou ware	01393	h:5.3  d:12.8	114		口が直線的に広がった碗の5ヶ所を深くくぼませて五弁の輪花状としています。金銀器を手本にした五弁の輪花は、うすづくりでドレープのようなゆるやかな曲線をなし、洗練された造形美を見せています。また、この時期の最上手の作品に共通する淡い青緑色の釉薬は半透明のややマット状の独特の質感を見せています。底部は墨付(たたみつき)と呼ばれる接地部分のみ釉が拭き取られて、やや赤みを帯びた灰白色の胎土がうかがえます。	
17	青磁 輪花盤 せいじりんかばん  LOBED DISH  Celadon	五代時代・10世紀  Five dynasties, 10th century	黄堡窯  Huangbao ware	04024	h:5.1  d:23.2	516	卯里欣侍氏寄贈(白樺廬コレクション)  Gift of Mr. Usato Kinji (The Hakutoro Collection)	五代黄堡窯では、灰黒色の胎土に白化粧をし、淡い青緑色を呈した上質の青磁も生産されました。底部にも釉を掛け、高台内に小さな目跡を残す方法は、後の汝窯にも継承されます。窯址からは「官」字銘のある類品の破片も見つかっており、宮廷向けであったことが分かります。五代では後周(951-960)の世宗(柴榮、921-959)が焼かせたといわれる伝説の「雨過天晴(青)(うかてんせい)」の青磁、「柴窯(さいよう)」が有名ですが、五代黄堡窯の最上手の青磁がそれであるとの説も知られます。丁寧な高台のつくり、高台内の3個の目跡、淡青緑色の釉色など典型的な五代黄堡窯の青磁といえます。	
18	青磁刻花 宝相華唐草文 壺 せいじこっか ほうそうげからくさまん つぼ  JAR  Celadon with carved Baixiang-hua scroll design	北宋時代・11～12世紀  Northern Song Dynasty, 11th- 12th century	耀州窯  Yaozhou ware	00719	h:12.2  d:12.0	371	住友グループ寄贈(安宅コレクション)  Gift of Sumitomo Group (The Ataka Collection)	短い頸の付いたうすづくりで小ぶりの壺です。わずかに外に開いた口縁部は絶妙なバランス感を見せています。緊張感ある張りを見せる胴部には、刃を斜めに入れる「片切り彫り」により宝相華唐草文が全面に施され、宝相華の花を正面から見た姿と側面から見た姿が交互に表されています。深く彫り込まれた部分に釉薬がたまり、この時期の耀州窯青磁特有のオリブグリーンの釉色に心地よい濃淡を生み出しています。小品ながらも北宋の耀州窯青磁らしい刻花技法の冴えと釉色の美しさが見られる優品といえます。	
19	青磁印花 唐子遊戯文 碗 せいじいんか からこゆうぎもん わん  BOWL  Celadon with impressed design of playing Chinese boys	北宋時代・11～12世紀  Northern Song Dynasty, 11th- 12th century	耀州窯  Yaozhou ware	01208	h:4.3  d:14.8	147		直線的に口が開いて口縁がわずかに外反した茶碗(盞)です。内部には印花技法で、太湖石や芭蕉、草の中を二匹の犬と戯れる童子5人が表されています。童子はいずれも首にマフラーのようなものをたなびかせており、無邪気に遊んでいる躍動感あふれる一瞬が見事に表現されています。光沢のあるやや黄味がかかった釉色は印花文の彫りの深さによって色の濃淡が生じ、文様を立体的に浮かび上がらせています。大量生産に適した型による印花技法からは、北宋耀州窯青磁の彫りの技術の冴えを間接的にうかがい知ることができます。	
20	青磁刻花 牡丹文 鉢 せいじこっか ぼたんもん はち  BOWL  Celadon with carved peony spray design	北宋時代・11世紀  Northern Song Dynasty, 11th century	耀州窯  Yaozhou ware	00814	h:5.1  d:20.8	355	住友グループ寄贈(安宅コレクション)  Gift of Sumitomo Group (The Ataka Collection)	鉢の内面には大きな花をつけた折枝状の牡丹文が向かうように配置されています。「富貴」の象徴である牡丹は宋時代のやきものの文様にしばしば用いられました。北宋の耀州窯青磁の特色はその彫りの技術であり、刃をやや斜めに入れ立体感を出す「片切り彫り」が多用されています。やや淡いオリブグリーンの釉色も耀州窯ならではの、深く彫り込んだ部分にたまった釉がより濃く発色し、文様に陰影をつけています。高台の接地部分は釉薬が掛らず、茶褐色の耀州窯特有の強い胎土をのぞかせています。	
21	青磁印花 花文 香炉 せいじいんか かもん こうろ  INCENSE BURNER  Celadon with Impressed Floral design	金時代・12世紀  Jin Dynasty, 12th century	耀州窯  Yaozhou ware	00619	h:13.9  d:13.6	675	住友グループ寄贈(安宅コレクション)  Gift of Sumitomo Group (The Ataka Collection)	耀州窯では金時代になると「月白釉」と呼ばれる玉のような質感を見せる淡い色調の白味がかった釉色の上質の製品が見られるようになります。月白釉の萌芽はすでに北宋晩期にも芽生えており、金の月白釉は宮廷にも献上されたと考えられています。この香炉はそうした月白釉の片鱗をわずかにうかがわせ、小ぶりながらも端正で丁寧な作行のものです。胴の四層の文様帯はそれぞれ異なる型で印花されたものです。耀州窯はその後元時代になると磁州窯風の製品が多くなり、青磁生産は下火となっていきます。	

番号	作品名称 るび	時代	窯/作者	登録番号	法量(cm)	重さ(g)	備考	作品解説	図版
22	青磁 長頸瓶 銘「鏡」 せいじ ちようけい へい めい かすがい  LONG-NECKED VASE  Celadon known as <i>Kasugai</i>	南宋時代・13世紀  Southern Song dynasty, 13th century	龍泉窯  Longquan ware	00588	h:22.8  d:13.4	945	住友グループ寄贈(安 宅コレクション)  Gift of Sumitomo Group (The Ataka Collection)	南宋時代の龍泉窯青磁は貿易品として数多く日本にもたらされ、「砧青磁」と呼ばれ珍重され、数々の作品が伝世しています。本作は金属器を写したもので、胴のふくらみから日本では「下蕪(しもかぶら)」とも呼ばれている器形です。口縁部には大きな「ニュー」(ひび)が見られ、それを3本の鉄製の「鏡(かすがい)」で修復していることから、「鏡」がこの作品の銘となっています。欠点を逆に見所とした日本人ならではの感性といえます。大阪の鴻池家伝来のものです。	
23	青磁刻花 龍文 高足杯 せいじこつかりゆうもん こう そくはい  STEM CUP  Celadon with carved dragon design	明時代・14世紀末～ 15世紀前半  Ming dynasty, Late 14th century- first half of 15th century	龍泉窯  Longquan ware	00770	h:12.1  d:12.4	496	住友グループ寄贈(安 宅コレクション)  Gift of Sumitomo Group (The Ataka Collection)	高足杯は「馬上杯(ばじょうはい)」とも呼ばれ、騎馬遊牧民の生活習俗を背景に登場した器形といわれています。杯部分の外面には、刻花により皇帝を象徴する五爪(ごそう)の龍文が表されており、宮廷用の製品(「官器」ともいわれる)であったことが分かります。近年、龍泉大窯楓洞岩窯址で明時代初めの碧緑色の美しい宮廷向け青磁の窯が発掘され話題となりましたが、この作品もそうした明初の龍泉窯の宮廷向け製品の一つとして貴重なものです。	
24	青磁刻花 牡丹文 梅瓶 せいじこつか ぼたんもん めいびん  MEIPING VASE  Celadon with carved peony design	明時代・14世紀末～ 15世紀  Ming dynasty, Late 14th century- 15th century	龍泉窯  Longquan ware	00796	h:32.3  d:22.5	4,240	住友グループ寄贈(安 宅コレクション)  Gift of Sumitomo Group (The Ataka Collection)	肩が豊かに張り、裾にかけてすぼまる、こうした小口の瓶は、「梅瓶(めいびん)」と呼ばれています。本来蓋を伴っていたと思われ、「清香美酒」銘のある作例もあることから、酒を入れる器であったと思われます。胴部には勢いのある刻花により、牡丹唐草文やが表されています。頭部と裾部にはデザイン化された鋸歯状文様や芭蕉文が施されています。宮廷向けの最高級品に匹敵する碧緑色の美しい釉色を見せています。厚いつくりで、4kgを超える重さがあり、底部内側には「S」字の焼成時の割れ(窯割れ)が見られます。	